

考古学ミュージアム主催講演会記録

焼き物の里 美山の歴史・文化をつなぐ

深港恭子¹⁾・井手江里子²⁾・松岡晃司²⁾

1) 891-0404 指宿市東方 12131-4 薩摩伝承館

2) 899-2431 日置市東市来町美山 1262-8 ガラス工房 Well hands。

司 会 小園紗代¹⁾

記 録 市来智昭¹⁾・下赤真司¹⁾

1) 鹿児島国際大学国際文化学部

司会 (小園)

みなさんこんにちは。今日は鹿児島国際大学国際文化学部主催講演会にお越しいただきありがとうございます。わたしは本日司会を務めさせていただきます小園と申します。

今日は、薩摩焼の里として知られる日置市の美山をテーマとして講演会を行います。美山は、日置市に所在する町で、豊臣秀吉の朝鮮出兵にともない連れてこられた朝鮮の陶工によって開始した、薩摩焼の中心地として知られています。

美山は薩摩藩の政策もあり薩摩焼をもとにして発展してきました。しかし、現在は住民の方々の高齢化や若者の都市への流出などによって、人口減少、過疎化の問題も浮上してきています。

そこでこの講演会は、薩摩焼の最新の研究成果を学ぶとともに、美山をモデルとして伝統と新しい文化の融合から、伝統の継承や町の活性化にどのようにつなげるか、ということを考えることをコンセプトとしています。

今日の講演会は、薩摩伝承館の学芸員として勤務しておられる深港先生と、ガラス作家として美山で新しいアートを生み出されている井手さん、「ガラス工房 Well hands。」店長としてお店を経営しておられる松岡さんにお話をさせていただきます。

最初に外薮幸一博物館実習施設長より挨拶をいただきます。

外薮幸一 (博物館実習施設長)

5年ぶりの大雪に見舞われまして、山間部には雪も残り、美山もまだ雪が残っているのではと思います。県内各地では水道管破裂など被害が続いているようです。そのような中、本日は考古学ミュージアム主催講演会にご参集いただきまことにありがとうございます。本学の考古学ミュージアムは、国際文化学部の資格課程であります博物館学芸員資格の養成のための実習施設をかねております。考古学関連に限らず、さまざまな分野の作品、資料を展示しております。また地域文化に貢献できるような講演会も開催しております。本日は、「焼き物の里 美山の歴史・文化をつなぐ」というテーマで、講演会を開催する運びとなりました。美山というのは、ご紹介がありましたが、朝鮮から強制移住させられてきた陶工たちが守り伝えてきた里として、知らぬ者はない有名な里ですが、今に残る伝統的な雰囲気、独特の情緒を醸し出す集落として、私もそこを通るたびに特別な感慨を覚えます。その美山に焦点を当てた講演会ができますことを、施設長として大変うれしく思います。

本日は3名の方に講師として来ていただいております。美山の芸術文化に関する多面的なお話を拝聴できることを大変楽しみにしております。

最後に、3名の講師の方と本日ご出席いただきました皆様に心から感謝申し上げまして、簡単ではありますが挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いします。



深港恭子氏（薩摩伝承館）

司会

ありがとうございます。それでは、最初に深港恭子先生に講演いただきたいと思います。深港先生は、福岡の西南学院大学を卒業され、黎明館で勤務後、指宿の白水館内の博物館である薩摩伝承館で学芸員として勤務されています。鹿児島の美術工芸史がご専門で、文献資料に精通され薩摩焼など鹿児島の近世、近代の研究で多くの新しい成果を出されています。それではよろしくお願いします。

薩摩焼の里 美山の歴史～その独自性と国際性～

深港

ただいまご紹介にあずかりました薩摩伝承館で学芸員としております深港と申します。今日は美山をテーマにお話しをさせていただきたいと思います。とくに、美山の歴史の中に見える独自性と国際性をみなさまにご報告したいと思っております。本日は大学でのお話ということで、はじめに、私自身がこの仕事に携わるようになったきっかけをお話させていただきます。

私は、学芸員という職業について20年を超えるぐらいになりますが、最初の10年間は鹿児島県歴史資料センター黎明館で美術を担当していました。黎明館は、郷土の歴史や美術がテーマの館ですので、それをきっかけに、郷土に伝わる伝統工芸品や絵画などに携わるようになりました。当時は日本画、油絵、薩摩焼、薩摩刀など様々なものを扱い、その展覧会に携わっていました。そうした縁があって、今ではとくに薩摩焼に深く関わっています。

続いて勤めることになった薩摩伝承館は、2008年に開館した鹿児島県内では珍しい企業立の美術館です。そのような関係で、公共の美術館よりも一歩お客様と近づこうと

いうコンセプトのもと、意匠性の高い美術館になっています。外観は水に浮かぶ日本風の建物になっているのですが、海外の方が見ても、日本の方が見ても、日本を感じられる建物にしたいということで、京都の宇治にある世界遺産の平等院鳳凰堂にお手本を求めて、水に浮かぶ左右対称の造形としました。屋根には7万枚の本瓦が乗っていきまして、本瓦葺という伝統的な瓦葺きです。これは、薩摩伝承館の母体である日本旅館の指宿白水館が、日本文化を伝える場として、見た瞬間に日本を感じてもらいたい、という願いから、この造形が選ばれました。

コレクションは焼物が大変多く、そのおよそ半分が薩摩焼でして、江戸時代のものから海外に輸出された明治時代のものまで含んでいます。特に明治期の焼物は、最近15年くらいでようやく認知されてきていますが、長く鹿児島の人にも忘れ去られた存在でした。なぜこのような輸出品の薩摩焼が存在していて、それは海外でどのように受け入れられたのか、一目見てわかるような展示にしようというねらいのもと、一階の展示場は、展示ケースを取り払い、作品を空間装飾として展示しています。一番大きい焼物は180cmの高さがあります。日本人である私たちが、イメージできないほど巨大化した薩摩焼の存在は、ヨーロッパの左右対称の大きな室内空間を、日本文化、特に薩摩焼で飾ることが一つのステータスになっていたことが背景にあります。それをこの空間で目の当たりにしてもらおうというのがテーマです。

金色に輝いているように見える空間「金襴の間」は、実際、輸出薩摩焼の背景に一万枚の金箔を貼り込んでいます。一つのねらいは薩摩伝承館でしか出会えない空間を作ろうということでした。また、これから話していきます明治時代の美山という土地が牽引してきた、輸出用の薩摩焼は、日本の焼物の中で、輸出品になったことで金が主体となって絵を描かれたおそらく唯一の焼物なのです。白薩摩という陶器に金彩や色絵が華やかに映える姿は、海外でも高く評価されました。このような観点から、この空間を作っています。

現在の職場で薩摩焼を見続けている立場から、薩摩焼を主体にして調査研究を進めており、今、私がつまみ注目しているのが美山という土地なのです。今日お話しする内容には新発見の部分もあり、まだ一般化してない点もあります。私の調べた結果や意見も若干含むのですが、それらも含めて美山の歴史を細かく皆さんにお伝えしたいと思っています。

薩摩焼とは何か、ということをご存じの方もいらっしゃると思いますし、そうでない方もいらっしゃるかと思いますので、基礎的なことから入ります。薩摩焼といえば、国の伝統的工芸品に指定されている鹿児島県を代表する工芸品ですが、現在の鹿児島県が定義しているところかというと、鹿児島県内で焼かれる焼物を薩摩焼と呼んでいます。

歴史的にみると、薩摩焼は大きく六つの系統に分かれます。朝鮮陶工の渡来によって発祥していますが、彼らが直接始めた系統が3つあります。つまり堅野系、苗代川系、龍門司系でして、この中の苗代川という土地が現在の美山です。さらにその後になって、朝鮮陶工とは異なる人々によって創始した焼物に、元立院焼、種子島焼、平佐焼があります。

焼物には磁器、陶器、焼き締め、土器がありますが、朝鮮陶工に連なる3つの系統は主に陶器です。一方その後創始した焼物は、元立院焼は陶器、種子島焼は備前焼などで有名な焼き締めです。平佐焼は磁器で、現在の薩摩川内市で焼かれていました。有田焼の原料を運び、技術者を招いて焼かれていましたが、昭和初期に終焉しています。それぞれを比較しますと、現在焼かれているのは、堅野系、苗代川系、龍門司系、種子島焼ですが、種子島焼は一度完全に断絶していますので、朝鮮陶工が伝えた系統のみが、現代につながっているということになります。堅野系は、鹿児島城下、つまり現在の鹿児島市で、藩が直接経営する藩窯が置かれた場所です。そのため、ここで作られる焼物は、藩主や上級士族が主として嗜んでいた茶の湯の道具や、薩摩焼の中では貴重品に位置づけられる白薩摩が主です。龍門司系は民需品のみを作ったところでした。白く見えるものも、基本的に土は黒色系統の色で、白い泥をかけて白っぽく見せています。

本日のテーマである苗代川系については、黒薩摩、白薩摩があり、そして平佐焼のような磁器もあります。歴史的に見ると、苗代川（現在の美山）は薩摩焼の中でも最も多種多様な焼物を作り、生産量もトップを走っていたと推測されます。焼物の里として、鹿児島を代表する土地であるということです。

ここで、薩摩焼を創始した朝鮮陶工の渡来を振り返ってみたいと思います。きっかけとなったのは豊臣秀吉の朝鮮出兵です。多くの人がご存知だと思いますが、薩摩から島津義弘軍が参加し、帰りぎわに陶工たちを連れ帰ってきました。薩摩焼の古文書類に基づく、七十余名が薩摩に着



薩摩伝承館の外観

船したとあります。ただし、これは薩摩藩に限ったことではありません。

朝鮮出兵は、文禄・慶長の役といいますが、特に西国を治めていた大名らを中心に出兵して行われた戦いで、文禄の役では約16万人が出兵したといわれています。慶長の役では、14万人くらいが朝鮮半島に渡ったといわれるほど、日本軍が大勢で海を渡りました。西国の大名らも、それぞれが陶工らを連れ帰っています。この時、何らかの理由で日本に渡ってきた朝鮮の人々は数万人規模にのぼっています。朝鮮出兵が終わると、今度は朝鮮国との国交が結ばれていくにあたって、連れてこられた人たちを本国に返すという動きが始まります。これを担当したのは刷還使ですが、記録によれば、6000から7500人程が帰国しています。それほど膨大な数の朝鮮の人々が日本にやってくるのです。その中のごく一部の人たちが陶工でした。薩摩焼を創始した人々も、その中に含まれていたということになります。

また、薩摩において、朝鮮からやってきた人々がもたらした技術は焼物だけではなく、産業の部分で言うと樟腦の製法や養蜂など他にもいろいろあるようです。さらに朝鮮通詞という言葉の技術で、薩摩藩の中で対外交流の一翼を担いました。

なかでも焼物は当時の最先端技術であり、日本国内にはまだない、進んだ朝鮮半島の技術であったことから、各藩が育成のために優遇措置をとり、主産業に位置づけていました。「先年朝鮮より被召渡留帳」によると70余名が薩摩に着船したとありますが、串木野の島平に43名の男女が、神之川に男女10名ほどが、そして鹿児島城下の目の前の海辺を昔は前之浜と呼んでいましたが、そこに男女20名ほどが着船したといわれています。それぞれに動きがありますが、最終的に一番多くの朝鮮の人々が集められたのが苗代川です。

一方、朝鮮陶工を連れ帰った島津義弘本人が住んでいた

のが現在の始良市です。藩主のすぐそばに一部の陶工が行きまして、加治木・始良周辺でずっと焼物を作り続けたチームと、義弘亡き後、お城が創建された鹿児島城下に集められたグループがありました。それらが、朝鮮陶工に流れをくむ3系統ということになります。

次に、薩摩焼の誕生の意味について、改めて整理したいと思います。朝鮮陶工がやってきたときに、国内には同じような製陶技術はなかったのですが、中世の時代には中世陶器という六古窯があり、信楽、丹波、伊賀焼などの有名な焼物が作られていました。桃山時代、朝鮮出兵の直前になると、織田信長、豊臣秀吉のもとで茶の湯が大変隆盛します。そこで国内で焼物の茶道具を作ろうという動きが始まっています。

しかし薩摩では、ほとんどそのような発展的な焼物は焼いておらず、いわば後進地でした。その当時焼いていたのは土師器、須恵器で、縄文・弥生時代からそれほど発展していない焼物しかありませんでした。

一方、朝鮮半島では、すでに10世紀には高麗青磁という磁器を焼いています。16世紀、ちょうど朝鮮出兵が行われた時期は、白磁の全盛期を迎えていました。非常に豊かな技術が育っていたところに日本兵がやってきて陶工を連れ帰ったわけですから、朝鮮陶工の渡来は、海外の進んだ陶磁器文化を日本国内に移入するという作業だったのです。そうして、釉薬という、表面にガラス質の被膜がかかる焼物が薩摩で初めて誕生するわけです。

薩摩焼の誕生は、素朴な焼物が生まれたというわけではなく、当時最先端の技術がぱんと薩摩に投げ込まれて、最先端の焼物がそこに生れた、ということです。最先端技術として誕生したのです。これは他藩も同様で、一気に国内窯業の技術革新が起きました。その象徴的なものが、有田での磁器の誕生です。これは歴史的な記録によると、1616年といわれています。今年は、有田焼にとっては磁器発祥400周年という記念の年となっています。

その他、山口県の萩焼、福岡県の高取焼、上野焼、筑前を治めていた細川家が熊本に移って八代焼、小代焼が生まれます。佐賀の有田焼、長崎の平戸焼も含め、これらは全て朝鮮陶工によってスタートを切っています。こうした陶工らは、初代あるいは二代目ぐらいには日本名に変わっています。

それでは薩摩焼はどうかといいますと、島津義弘の一番近くにいた金海は、1601年に宇都窯を現在の始良市帖佐

に作り、島津義弘の命を受けて茶道具を作り始めます。金海は義弘から星山仲次という名前を拝名します。その後義弘が亡くなると、鹿児島城下の堅野窯という藩窯が開かれます。そこで金海系統の星山家、あるいは田原家、有村家などが活躍します。田原家も朝鮮陶工に連なる家柄です。

苗代川はどうかといいますと、串木野上陸の団が最初串木野で焼物を焼いていましたが、1603年くらいに苗代川に移住したとされます。古文書類では、自力で移動したことにしていますが、現在は藩の力が作用して意図的に移動させたのではないかともしわれています。1620年代になって朴氏清左衛門が白い土を発見し、白薩摩が誕生します。最初、白薩摩は存在せず、藩命を受けて探索が行われました。有田ですでに白磁が誕生していますので、薩摩藩でもおそらく磁器を焼きたかったのではないかと私は考えています。しかし磁器を焼く原料が藩内にはありませんでした。そのかわり、陶器だけでも白い焼物を焼く土が見つかり、それを原料として白薩摩という白い陶器が誕生しました。面白いのは、清左衛門が白土を発見した功により、貞用という名前をもらっていることです。他の事例をみると、朝鮮名の人が日本名を与えられているのに、この時は朝鮮名を貰っているのです。

これらをまとめると藩の内外に関わらず、初代から二代目までに和名をもらって、帰化をして日本にどんどんと溶け込んでいます。それとともに苗字を拝名していますので、士族の格を与えられたということです。藩が主産業として育てたいということで、朝鮮陶工を優遇していたことが確認できます。

同じように、苗代川も初期には、日本化がどんどん進んでいます。これは当然のことだと思のですが、苗代川だけは日本化している名前から朝鮮名を拝領しているのが非常に異質なところですが、まだはっきりしませんが、藩の思惑がこの頃すでに作用しているのではないかと、苗代川を、朝鮮風の風俗をそのまま保った地域として確保しようという意図が、この当時からあったのではないかと最近考えています。

ここからは、藩が苗代川に対して行った政策と地域の独自性について見ていきたいと思います。他地域と最も顕著に異なるのは、藩が行った政策そのものです。具体的には以下の3つが挙げられます。

1つ目は、朝鮮から渡来し鹿児島城下に住んでいた人たちを、皆苗代川へと集め、集住地を作ります。2つ目は、

できあがった集住地に対して、社会基盤と焼物の生産基盤を藩が与え、非常に優遇しています。この二つは、全国的に見ると、産業を育てたいという立場から、対職人集団に対して他の地域でもよく行われています。

しかし、3つ目が特異です。それは朝鮮風俗化の統制です。よく朝鮮の風俗が守られたという言い方をしますが、私自身はそうではなく、いったん日本化したものを朝鮮化に押し戻す、そういう作業を藩が行ったと考えています。このような施策は薩摩藩独自のもので、他藩ではまったく事例がありません。特に焼物では、苗代川が唯一と言っていいかと思います。

藩が行った優遇策とは具体的にどういうものかというところ、屋敷や井戸、耕作地などをすべて藩が与えます。そして焼物を作るための燃料、あるいは薪を育てる山、いろいろなものを藩が支給して苗代川を育てていくわけです。

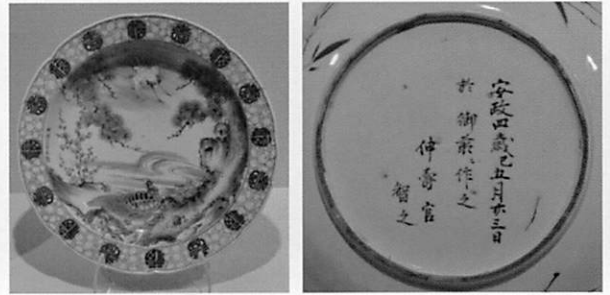
一方で統制を行います。これが朝鮮風俗化になります。それが始まるのが1675年ごろで、この年、苗代川に藩主が参勤交代の時に一泊するお飯屋が建てられています。これを境に、朝鮮化の政策が何度も藩命として出されます。1676年には、他所への縁組禁止が命ぜられました。苗代川の人々が結婚して他所へ出て行くことは禁止し、他の土地から入ってくることは許すというものです。

そして1695年には本国朝鮮の姓名を名乗ることが許可されますが、こうした藩命が出るのは、その時点では苗代川の人々が日本名に変わっていたことを裏づけるものもあります。日本の苗字とは異なり、あくまでも朝鮮で使っていた姓名を許すというものでした。

1771年には朝鮮服の着用、朝鮮風の髪型や服装をするよう藩命がでています。そういう統制をしながらも、苗代川という村落にはきちんと村役人を置いて、役人家四家に士族の格を許し、地域に門構えを許可します。

美山を訪れると、門構えがきちっとした、区画のしっかりした集落の風景があると思いますが、これは藩による特別な措置の名残が今も残っているのです。

江戸時代に描かれた、「苗代川帰化朝鮮人図」は当時の人々の姿をよく描き出しています。このような朝鮮的な苗代川（美山）の姿は、実は藩の政策によって形作られたものでした。薩摩藩以外でも、窯業は育っていきますが、苗代川に対して行われた政策は、他の土地では全く行われていない独自のものであり、他産地とは対象的な様相を呈しています。



御前細工とみられる染付磁器皿（沈家伝世品収蔵庫蔵）

さらに、もう一つ苗代川の独自性といいますと、参勤交代の際の藩主の休泊地として1675年に御飯屋ができて以来、江戸時代が終わるまでその立場を継続していたということです。藩主が参勤交代を行う際、江戸に向かう第1日目の宿泊地、そして江戸から戻ってくる最後の宿泊地に苗代川は定められていました。そこでは、以下のことが慣習となっていました。

苗代川には、朝鮮由来の神舞踊があつて、近年まで脈々と受け継がれてきたと聞いていますが、それが江戸時代を通じて藩主の御前で披露され続けています。御茶屋・市も建てられ、甘酒や焼酎が藩主にふるまわれ、市には焼物も飾られたといわれます。そして必ず村役人から藩主に対して進上物を行い、藩主からは銀子をいただく。これが慣習化して営々と続いていました。さらには、オプションとして、高麗相撲や高麗踊りを披露し、朝鮮語の席書や音読をするなど、苗代川にしかない個性のあるものを藩主に披露しています。焼物の視察や、藩主の御前で技術を披露する御前細工も行われていました。

これについては、幸い実例が残っています。美山の沈壽官家に伝来する染付磁器皿に、「安政四歳己五月廿三日、於 御前二作之、仲寿官智之」とあります。安政4年(1857)5月23日に、藩主の御前で作ったと記録されています。当時の藩主は島津斉彬です。斉彬は5月24日に鹿児島城に到着したことがわかっていますので、これは斉彬の御前で技術を披露するため作られたことが確認できる貴重な作品です。

このように、苗代川には藩主に接見する機会が毎年のように与えられていました。薩摩藩の農村地区においても、藩主がいろいろな地域を廻って、住民と接することがなかったわけではないのですが、毎年のように対面する機会に恵まれるのは、苗代川ならではのことであり、優遇的なものであっただろうと思います。藩主が苗代川にご休泊した折に、重要な指示が出されています。定期的な藩主との



玉山神社と「玉山宮由来記」(沈家伝世品収蔵庫蔵)

接点が、江戸時代を通じて藩が苗代川に注目し、優遇策をとる根拠になっていたのだと思います。

もう一つの苗代川の独自性は、朝鮮通詞の里としての存在です。江戸時代は、東アジア周辺で帆船によるさまざまな貿易が行われていました。そこでは思いがけない漂着も起こります。たとえば中国の船が誤って日本に漂着してしまったり、本国に帰してあげるといふ国家間の送還体制が整っていました。その関係で、薩摩藩の中には朝鮮通詞、唐通詞、西洋通詞が配置されていて、3つの外国語通訳のシステムをもつのは他の藩には例がありません。薩摩藩がもっとも充実していたといわれています。

その中の朝鮮通詞が、苗代川で育成されていました。今日はその中身は割愛させていただきますが、美山には近年まで朝鮮通詞育成の教科書が伝わっていました。たくさんあったようですが、昭和40年代ころ、薩摩焼や古文書のブームがあり、だいぶ散逸してしまったと聞いています。現在、京都大学などに朝鮮語教科書の充実したコレクションがありますが、美山で収集されたものも多く含まれます。現在、沈壽官家に8種18冊の教科書類が伝わっています。沈壽官家を訪ねると沈家伝世品収蔵庫で展示されていますので、見るができます。『交隣須知』は、朝鮮語の辞典です。例えば、花瓶はこういうものだ、というのがハングルで書かれています。『漂民対話』は、漂流民から朝鮮通詞が聞き取った情報をまとめた本です。教科書類の多くは、対馬でできたものを転用し使っていたといわれますが、『漂民対話』は苗代川で成立した本とされ、大変貴重です。

昨年10月、日置市が主催し美山で行われた「美山の軌跡」という展示を監修させていただいたのですが、モノによって美山の歴史をとらえようと調査を進めている最中、玉山神社の遺物の存在を教えてください、調査することができました。それらを通じて、美山が信仰の部分においても、どれほど強い個性を持っていたのかが明らかになってきま

した。今日は遺物の中身には触れませんが、玉山神社は江戸時代「玉山宮」と呼ばれていました。苗代川という土地が成立して間もない慶長10年(1605)に建てられたといわれています。

慶応3年(1867)に記された「玉山宮由来記」に、玉山神社の成り立ちが書かれています。そこには「延宝の初、夜々上の山に炎気を生じ、奇瑞の変多し。人々之を疑いト筮者に問ふ。朝鮮尊崇の神垂迹の変也と答ふ。(略)炎気生する所之大岩を拝し宮殿营造八月十四日成る。皆衆力也」とあります。つまり、美山の山の方から、火の玉のようなものが夜ごと生じる。これは何かと占い師に聞いたら、朝鮮を創始した神がこの地に降り立った兆しであると答えた、と記されています。その場所が現在の玉山神社であり、この時に炎気を生じた大岩が、玉山神社のご神体であるといわれています。

つまり美山の玉山神社は、江戸時代から朝鮮の神を祀り続けているということです。ただし、神社は1605年くらいにはできており、延宝(1673-81)の頃に、薩摩藩の手で神社を改築するという動きがありますので、おそらくそうしたことをとらえて書かれているようです。

さらに、「玉山宮由来記」は江戸時代の終わりに書かれたもので、当時苗代川を治めていた役人23名が連署しているのですが、最後の部分で次のようなことが書かれています。「吾祖廟玉山宮発起を知らざりては、人より尋問に預かり候節、返答成し難く、唯高麗神とのみ相答候而は赤恥」。つまり、他の土地の人から玉山宮について聞かれたときに、ここに住む私たちがそれを知らないのは恥ずかしいことである、だからここに由来をきちんと記して、それぞれが認識しようという目的でこの由来記を書いたのです。苗代川に当時暮らしていた人々が、積極的に自らの土地と高麗神の檀君を語っていたということです。

こうしてみると、玉山神社の検証は今後たいへん重要な課題です。苗代川の人々は、アイデンティティをどこに置いていたのか、彼らは朝鮮風俗を守った暮らしを誇りに思っていたのか、ということを考えるときに、非常に大きなヒントを与えてくれるだろうと思っています。

ここからは、苗代川で作られてきた焼物を振り返ってみたいと思います。苗代川では、黒薩摩、白薩摩、磁器と多様な生産を行ってきましたが、白薩摩についてはほとんどわかっていません。苗代川では江戸時代の寛延年間(1748-51)に藩御用の御物窯が開窯したといわれています。

現在は御定式窯と呼んでいますが、窯跡はまだ発掘されておらず、どういうものが作られていたのかを確認することはできません。一方、白薩摩といえば鹿児島城下の堅野藩窯で大量に作られていますので、白薩摩はおおむね堅野産と判断されてしまいます。苗代川産白薩摩はおそらく、堅野産と非常に似ているはずですが、なぜなら、どちらも藩の御用窯で製作されたものだからです。

こうした状況の中、苗代川産の白薩摩を知るうえで大変貴重な資料が、玉山神社に奉納された遺物です。①享和元年（1716）の銘が記された花瓶、②天保13年（1842）銘の徳利、③慶応2年（1866）の燭台があります。②③は確実なもの、①は銘文からは確定できませんが、玉山神社の遺物の収蔵状況から、現段階では苗代川産であろうと推測しています。苗代川産白薩摩はこれほど実例が少ないのです。①②は透明釉の下に呉須で字を描いている釉下彩です。江戸後期になると白薩摩には華やかな絵を描く上絵付けが施されるようになりますが、③の強い青色の文字は、上絵付けで書かれています。③によって、1866年には、確実に苗代川で上絵付け技法が行われていることを確認できます。古文書類によれば、1844年から1860年くらいに上絵付け技法が苗代川に植え付けられたと考えられます。

黒薩摩は、苗代川の土地で最初からずっと作り続けられて今につながっているもので、もっとも大量に作られてきました。中でも最も藩に貢献したのが茶家です。薩摩焼における最大の藩外輸出品となりました。茶家というと、現在ではそろばん形のをイメージされると思いますが、あの姿の茶家が主流になったのは非常に新しく、江戸時代はべたっとした背の低いものはそれほどありません。主流は胴が丸みを帯びた形で、注ぎ口と三足がついた容器です。お酒のためのものではありません。直火にかけ、お茶や薬草を煎じるための、生活に欠かせないものでした。そのため、これは全国に流通しています。

文政11年（1828）頃になると、藩の記録に、他国でも利潤をもたらす重要産品として茶家が記録されています。その主産地が苗代川だったのです。薩摩藩の殖産に、苗代川が貢献していた実例といえるわけです。

それでは、どれくらい全国に流通していたのかをうかがうことができる面白い資料がありますのでご覧ください。『東海道中膝栗毛』を描いた十返舎一九が、1802年に『瀬戸物忠臣蔵』を書いています。これは大石内蔵助率いる家臣らが当主の仇討ちをするという忠臣蔵の物語を、登場人物をすべて焼物に置き変えてパロディにした滑稽絵本です

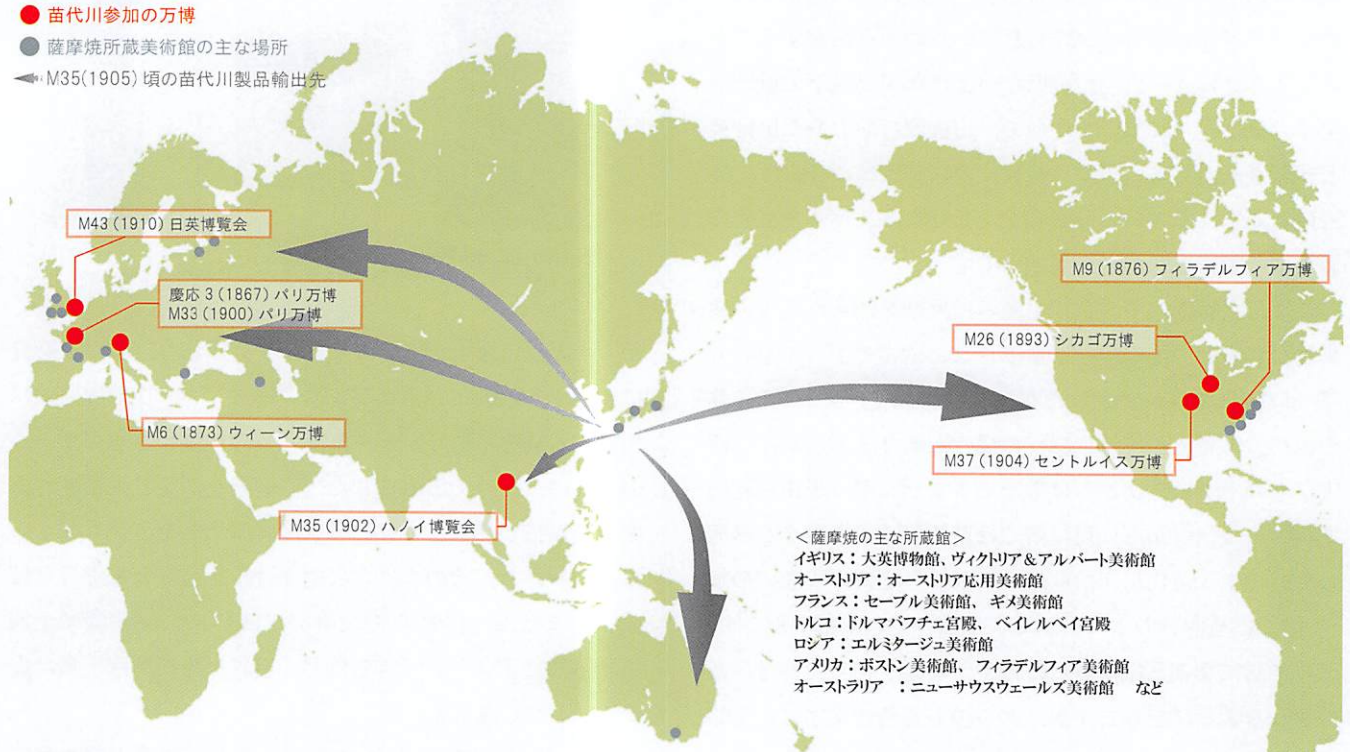


玉山神社に奉納されていた白薩摩
(左:「享和元年」銘 中央:「天保13年」銘 右:「慶応2年」銘)

が、この中に薩摩土瓶が登場します。それも、吉良上野介に相当する敵役という重要な役どころです。浅野内匠頭に相当する焼物に斬りかかられているのが薩摩土瓶です。このように、江戸で出版された一般の人々が読む滑稽本に薩摩土瓶が描かれるということは、薩摩土瓶を庶民もわかっていただけて、そのような広範な普及を前提としなければ成立しません。1802年の段階で、江戸の人々が薩摩土瓶を具体的にイメージできるほど、苗代川産の薩摩土瓶は広く流通していました。

さらに時代が進んで1845年になると、殖産振興のために、藩が主導して苗代川の土地で磁器生産が始まります。「苗代川御取救」事業というもので、薩摩焼を研究する私たち以外の日本史研究者にはほとんど知られていないと思います。藩の財政改革を行った幕末の家老、調所広郷のことはみなさんご存じのことと思いますが、苗代川の磁器生産は調所広郷の財政改革の一つに数えられます。この事業は特徴的なものでした。苗代川に対し、農業を安定させて、租米、税収を上げようとした農政改革と、焼物を作っている土地の特性を活かして特産品を増やし、美山の土地を繁栄させることによって藩の収入を上げようとする殖産振興策を組み合わせたものです。これは、苗代川の地域性を活かした独特の政策です。

そこで始まったのが、正式には肥前伝焼物窯という、現在の南京皿山窯跡で行われていた磁器生産です。調所の命を受け、苗代川で実際に改革にあたった村田甫阿弥の運営記録によって、いかに資金と人材を投入して磁器生産を育てるか、これに藩が周到な準備して、強力な支援体制で発展させたのがよくわかります。わずか5、6年で窯が3つに増えますし、他藩の磁器の流入もストップさせています。藩内の磁器需要は、藩内の生産でまかなうという藩の政策のもと、苗代川保護の対応が行われ、専売制まで敷かれています。磁器生産は藩の支援のもとに急速な発展をとげたのです。現在の美山からは想像できないほどの、大きな工業地帯が苗代川にできていたことがうかがえます。



美山の白薩摩が輸出された地域

この磁器生産をもって、苗代川には陶器の御定式窯と磁器の肥前伝焼物窯（南京皿山窯跡）という2つの御用窯が置かれることになりました。鹿児島城下でも藩窯1つですから、2つの御用窯が置かれたのは苗代川のみです。さらに白薩摩・黒薩摩・磁器という他に例を見ない多種多様な生産を行うようになりました。

明治になると、このような江戸時代の焼物生産の蓄積が一気に海外に向かって花開きます。この世界地図をご覧ください。矢印は明治35年当時、美山の白薩摩が輸出されていた地域を示しています。ロシア、ヨーロッパ、東アジア、東南アジア、オーストラリア、アメリカ、と全世界に輸出されています。赤い点は、苗代川の人々が参加した万国博覧会が行われた場所です。こうした歴史を裏づけるように、現在世界各国の名だたる博物館、美術館に薩摩焼が所蔵されています。ロシアのエルミタージュ美術館には、島津家がロシア皇帝ニコライに贈ったすばらしい苗代川産の薩摩焼があります。

当時の輸出手段は船です。苗代川に海はありませんが、苗代川で作られた製品が鹿児島港に出て、長崎や神戸、横浜など国際貿易港に運ばれ、そこから海外へと送られていきました。今、美山の土地を拠点として世界を眺めた時、

明治という時代に薩摩焼を作っていた先人のバイタリティがどれほどのものだったのか、想像していただけるのではないかと思います。私自身も、このバイタリティには驚きばかりです。

万国博覧会に薩摩焼を出品した人々の名前を列挙した表をご覧ください。きっかけとなったのは、慶応3年（1867）の第2回パリ万博で、朴正官が出品して大きな評価を得たと言われています。明治に入ると明治6年（1873）に開催されたウィーン万博で、十二代沈壽官が高い評価を得ました。これらは有名な話ですが、その後も苗代川から万博へ参加します。表の青い文字が鹿児島市内、黄色い文字が苗代川からの出品者です。万博への出品がはじまった当初は、苗代川の人々が出品のほぼすべてを担っていたことがわかります。明治時代は絵付けのある華やかな薩摩焼の大輸出時代でして、薩摩焼は日本の中で最も早く世界で評価を得ました。このような博覧会の出品の様相を見ると、薩摩焼の海外での高い人気を構築した担い手が苗代川の製陶家だったことがよくわかります。

このような明治時代の様相は個性的です。日本の文化伝播という大きな流れからみても、非常に特異なものです。一般的な文化の流れは、都会から地方へと伝播します。地方が都会に学ぶのです。しかし、薩摩焼の輸出は、先に鹿

万国博覧会への薩摩焼出品者一覧

万博名称・年代	出品者・受賞者(黄:苗代川 青:鹿児島市)
第2回パリ 慶応3(1867)	出品者 朴正官 *出品詳細不明 好評を得る
ウィーン 明治6(1873)	出品者 十二代沈壽官 *出品詳細不明 受賞 鹿児島県:進歩賞(部門「土器及び陶の茶器類」)
フィラデルフィア 明治9(1876)	出品者 中島良慶(作者:何三官、伸龍門、金泰京) 受賞 装飾陶器で受賞
第3回パリ 明治11(1878)	出品者 柿本彦左衛門(鹿児島県下) *出品詳細不明 受賞 銀拝
シカゴ 明治26(1893)	出品者 沈壽官、奥原源達、東郷壽勝、鮫島訓石、有馬芳徳、慶田茂平、玉利正太郎 受賞 沈壽官(透彫評価)
第5回パリ 明治33(1900)	出品者 東郷壽勝、沈壽官、隈元金六 受賞 銀牌:東郷壽勝 銅牌:沈壽官
セントルイス 明治37(1904)	出品者 東郷壽勝、沈壽官、慶田政太郎、隈元金六 受賞 金賞:慶田政太郎、東郷壽勝 銀賞:沈壽官 銅賞:隈元金六
日英博覧会 明治43(1910)	出品者 東郷壽勝、奥原源市、慶田政太郎、隈元金六、熊谷政助 受賞 金賞:東郷壽勝、慶田政太郎 銅賞:奥原源市、隈元金六、熊谷政助

児島で作られた焼物が海外で人気を博したことによって、鹿児島で作られた焼物が人気があるなら私たちも作りたいということで、横浜薩摩、東京薩摩、大阪薩摩、京薩摩、神戸薩摩、金沢(九谷)薩摩、長崎薩摩といった、都市を中心とした産地が薩摩焼生産に参入していきます。地方である薩摩を、都会が追いかけるという構図ができるのです。これは他にほとんど例をみることがありません。この稀有な事例を牽引していたのが、美山(苗代川)の製陶家だったのです。

なぜこのようなことができたのか?を考えてみると、薩摩藩という視点でいえば、たとえば昨年世界遺産に認定された近代化遺産にみる島津斉彬の開明性や、近代化への意識の高さ、海洋国家としての存在感、パリ万博での薩摩藩の活躍などありますが、もう一つ、美山(苗代川)という土地の、江戸時代における国際性、つまり朝鮮陶工によって創始し、江戸時代を通じて朝鮮通詞として海外との結びつき、そして明治時代へとつながっていくという、美山の土地がもつ国際性が貢献しているのではないかと考えています。

最後に、美山のあゆみをまとめますと、江戸時代は薩摩焼の中心地として藩の優遇と統制を受け、発展しました。また、焼物生産や朝鮮通詞のように、薩摩藩という枠組みの中で果たしてきた役割には大きいものがありました。そして苗代川という土地に対して、江戸時代を通じて藩は熱

い視線を送り続けていたことをうかがうことができます。明治時代になると、世界と向き合い、薩摩焼の海外輸出を盛んに展開します。美山にある神社は玉山神社といいますが、明治時代に入って御用窯が民営会社になった際、「苗代川陶器会社」と名づけられましたが、別名を「玉山会社」といいました。また沈壽官家が明治8年に民営の窯元となりますが、「玉光山陶器製造場」と名づけています。そして東郷茂徳の父親であった東郷壽勝も焼物生産を始めますが、彼が屋号としたのは「玉明山」でした。そして鮫島訓石という方も世界に輸出して活躍しますが、彼も製品に「玉山」と銘を入れています。世界に向かって活躍した人々は、すべて「玉」と「山」という字を会社の名前に入れています。これは、玉山神社を誇りにした証であろうと思います。美山の独自性とは、これまで話してきましたように、美山の国際性そのものの歴史のように思います。そして、美山は400年以上一貫して薩摩焼を作り続けてきたものづくりの里です。美山の持つ独自性と国際性、そしてものづくりが、いまの美山の基礎として蓄積されているのだらうと思います。

これで私の話は終わりたいと思います。ありがとうございました。

司会

続きまして、井手江里子さんにご講演をお願いしたいと思います。井手さんと松岡さんはご夫婦で、井手さんは鹿



井手江里子氏（ガラス工房 Well hands。）

児島短期大学、松岡さんは鹿児島経済大学の出身です。井手さんは当初民間企業のOLとして勤務していましたが、その後ガラス作家に転身され、現在美山までベネチアングラスの制作に取り組んでおられます。

それでは、井手さん、よろしくお願いします。

ガラスに魅せられて

井手

はじめまして、ガラス工房 Well hands。の井手江里子と申します。このような機会をいただきまして、ありがとうございます。大勢の方の前で話すのは慣れておりませんので、多少お聞き苦しい点もあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いします。

私は谷山出身で、谷山小学校、谷山中学校、鹿児島高校、鹿児島短期大学を卒業しまして、みなさんのOGにあたります。鹿児島短期大学では、教養学科で山田晋先生のもとで社会学を学びました。先生が常におっしゃっていた言葉で、印象に残っているのは「すべてに問題意識を持ちなさい、無関心ではいけない。」という言葉でした。短大時代は、自分がこれからどのような道に進んで、何をするかは全く決めていませんでした。

なぜ私がガラスの道を選んだのかというと、卒業旅行で訪れた沖縄がきっかけでした。沖縄で、初めてガラス工房を訪れました。私はガラスを製作しているところを見たのは初めてでした。それまで完成したガラス製品には冷たい印象がありましたが、工房で職人の方が汗だくになって作業されていました。竿の先にガラスがついていて、オレンジにきれいに発色しています。それを見たときに、「なんてきれいなんだ、これはなんだろう、これをやりたい」と、

ただ漠然と思ったのです。しかし、どうやってガラスを作ればよいのかわからないままではありますが、OLとして働き始めます。

私は中学校から高校時代バスケット部に入部し、社会人でも続けていました。いまの主人と出会い、充実した日々を過ごしていました。そうした中で、突然父が他界します。父とやり残したことがたくさんあり、聞いてもらいたいこともたくさんあって、後悔の日々を過ごしました。母は私にこのように言いました。「私はおじいちゃんもおばあちゃんも自分で看取り、父まで看取ることができた。私には何も悔いはない」。その言葉を聞いて、母はすごくカッコいいと思い、母をいまでも尊敬しています。そのような折、夢の中に父が出てきて、「おまえはやりたいことをやれ」と一言いってくれました。その一言で、目が覚めて、「私は何をしたかっただろう」と考えたとき、ガラスをしたいという気持ちがだんだんと湧き上がってきました。

その頃は携帯もパソコンも持っていなかったもので、図書館に走って、どうすればガラスを勉強できるのか調べて、東京にガラスの専門学校があることを知りました。ガラスの専門学校に入学したいと母に伝えて、25歳のときに入学することを決心します。

そこで、何もかも初めてづくしの日々が始まりました。希望に満ちあふれて、初めて見る設備や、初めて見る道具、初めて出会う人たち。高校を卒業して入学した人もいれば、子育てを終えたお父さんが来ていたり、私のように一度社会に出てガラスをはじめようとしている人もいて、幅広い年齢の方々がいました。

学校は基礎科と研究科の4年間通いました。ガラスにはいろんな技法があることを知りました。私がしてみたかった、吹いて作る吹きガラスや、鹿児島で有名な切子というカットの技法、アクセサリーを作るパーナーワーク、電気炉を使うキルンワーク、それと、溶接で道具を作る金属加工、これらを日替わりで勉強していきます。吹きガラスの授業で、初めてガラスを窯から巻くときに、1200℃の熱さを体験したことがなく、窯の熱さに腰が引けてしまいガラスをほんの少ししか巻けませんでした。それでも、そのガラスがすごくきれいで、楽しかったことをいまでもよく覚えています。

吹きガラスは、一人で作るのではなく二人一組で作るものです。そこで、相手に何を作るからこれをしてください、という指示しなくてはなりません。人とのコミュニケーションの大切さを知りました。そうして自分の作りたいも



ガラス工房 Well hands。の外観と店内



のを決めて、2年次に自分の専攻を決めることになります。皆吹きガラスがしくて入学するのですが、そのころには5名ほどに減ります。なぜかという、ガラスを吹きたいものの体力が続かなかったり、人への指示、コミュニケーションがうまくできなくて、別の作業性のものに変えたりする場合があります。

私はもっとガラスを吹きたいと思ったので、先生のアシスタントになることを申し出ます。授業ではなく先生の個展用の作品を作る手伝いができ、緊張感のある中で、自分を追い込みながら作品作りに携わることができるからです。しかし先生から教えられることは簡単にできるわけではなく、自分でガラスを巻いて作り、ガラスを感じないと、ガラスを扱い理解することはできません。ガラスは竿に巻いて作るのですが、竿を常に回していないと、垂れてしまいます。ガラスは生き物のように変化します。それを重力や表面張力、遠心力をうまく使って形を作ります。自分の作りたいものの幅が広がるように、日々修行をします。

勉強する中で、自分が作りたいものが出てきます。いろいろなことに挑戦しますが、なかなかうまく作ることができない。やりたいことも出てくるがなかなかうまくいかない。そこで自分は人よりも下手なのではないかと思うようになります。自分よりうまく作る人に対して、嫉妬心が芽生えてきます。人に対してこのような嫉妬心を抱くのはいままでなかったので、戸惑いました。それでも一緒に勉強していく中で、私がうまいと思っていた人も、その人の中でうまく作ることができず悩んでいることに気づきました。それに気づいた際に、「競う相手は人ではなかった。自分が作りたいものをガラスと一緒に作っていかないと、何もつくれないのだ」とわかったのです。

そうすると、もっといろいろな人の作品を見てみたいと思うようになります。またいろいろな人の作品を作るのを手伝いたいと思うようになります。学校では、ワークショップなどで作家さんに「個展用の作品を作るときは、呼んでください」とお願いしました。すると、学生なので声をかけやすいというのもあり、工房に来ていいよ、と声をかけて誘っていただきました。そこで個人の工房を訪問し、工房のようすをみるができますので、窯の違いや作品、何を大切に思っているのか、ということの違いを目の当たりにし、勉強することができました。

自分自身も、まだガラスを初めて2年ほどで、それほど上手というわけではありませんでした。必死に食らいつきました。窯は温度が高く、工房によっては手が火やけして赤く腫れ上がったり、顔の皮がめくれましたが、ガラスのためなら苦ではなく、楽しい時間でした。そうしていろいろな作家の作品作りを手伝うことで、自分がどのようなものを作りたいのかを考えていきました。

作りたいものが増えてくると、技術を上げるために、ペアというパートナーの人にこのようにしてほしいと伝えることが必要です。しかし、自分が何を作りたいのか、ということ言葉を表すことの難しさがあり、お互い理解できず工房内で大ゲンカすることもありました。でも、それはお互い真剣に作りたいものがあり、その結果ぶつかりあうのであって、今の自分の技術はその時のケンカがなくては作られなかったと思っています。

基礎科の卒業制作を見たギャラリーの方から、声がかかって、二人展をすることになります。今まで自分の作品を売ることがなかったので、初めて自分の作品を、私のことを知らない人が純粋に作品だけを見て買ってくれるとい



レースガラス制作のようす

う日が訪れます。それを聞いたときにすごくうれしく、夜は焼酎をいっぱい飲んだことを覚えています。

自分は何を作りたいのか、私はレースガラスを作りたいということをその頃決めていましたので、一度ベネチアに行ってみたいという思いもあり、勉強を兼ねて10日間ベネチアに行くことにしました。そこでも、日本人の方と話をさせていただきました。その方は、勉強してベネチアにきたのではなく、旅行先でガラスに目覚めてしまって、その場で頼み込んで入れてもらった人や、大学で建築を学ぶ中でガラスに出会い、面白そうだなと始めた人がいたりして、すごく面白いと思いました。イタリアの工房で毎日レースガラスの制作を見せてもらいましたが、イタリア人の作るガラスはダイナミックで、ちまちましていないと感じました。会話をしながら、ガラスをうまく作っていることに驚きました。

日本に帰国して、卒業後どうしようかと考えました。鹿児島に帰って独立したいという思いが最初からあったので、千葉の学校の先生の工房で、独立するための勉強をしながら働かせてもらいました。月3万円の給料をいただきましたが、自分では生活はできないので、親にお願いして援助してもらいながら勉強しました。鹿児島で、どこに工房を建てるかを考える中で、いろいろな場所を見たのですが、そこで美山に出会います。窯元、木工房、剥製屋など様々な作り手が集まっている町だったので、初めは窯元以外入れないのではと思っていました。いろいろな方に尋ねると、「新しい工房も大歓迎だよ、クラフトの町としてやっていきたいから、おいで」と言ってくださいました。自分

自身も、ここで成長しながらものづくりができるのでは、と思い美山に決めました。

工房を建てながら、窯も同時進行で作っていきます。窯を自分で作っていると、みなさん気になって様子を見に来てくださいます。その中で、一人の窯元さんが見にいらっしゃって「ここでお店を開くならあいさつ回りに行ったほうがいいよ、一緒に行ってあげるから、行こう」と声をかけてくださいました。見知らぬ私にそのように行ってくさったのがすごくうれしくて、一緒に窯元さんを廻ってもらい、私もそういう機会があればこのように接しようと思いました。

2005年の1月1日に、窯の火を入れ、約半年ぶりのガラスづくりが始まりました。最初はお店を閉めたまま製作だけを行っていましたが、私の誕生日の6月2日のオープンを目指しました。しかし、オープンするには一人で店を開けるのは大変だと悩んでいたところ、今の主人が「仕事を辞めて手伝ってもいいよ」と言ってくれました。私としては、男性に仕事を辞めてもらってまで自分のやりたいことをしてもいいのか、と思うところがありまして、悩みましたが、ご両親のご理解もあり、二人でオープンさせることができました。

オープン当日を迎えて、特に宣伝はしていなかったのですが、ロールカーテンを開けると、美山の人たちが来てくださいました。最初に住民の方が店に来てくださったのがすごくうれしかったです。もともとみなさん窯元で働いて、器には厳しい目を持っていたと思います。その中で自分のガラスをみて気に入ってくださって、たぶん育てようとい

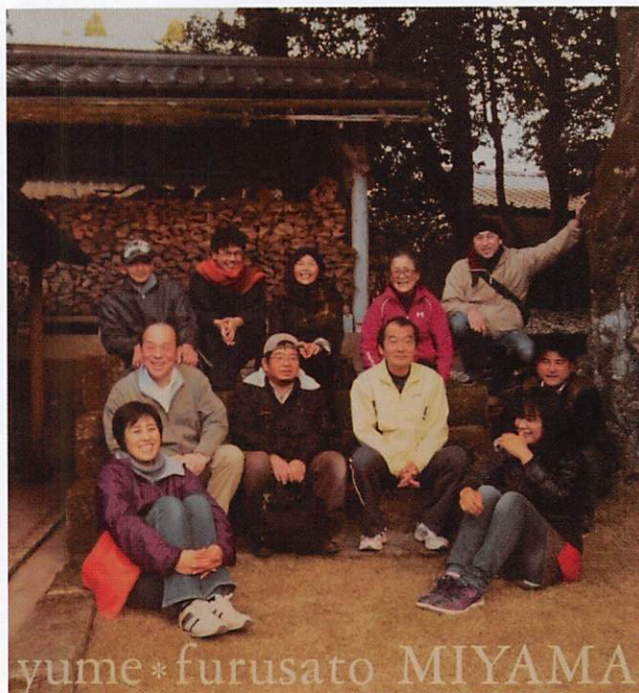
う意識のもと、買ってくださったことがすごくうれしかったです。

私自身も美山の名に恥じないように制作を続けました。2007年に、軌道に乗ったこともあり、いまの主人と結婚をしました。工房の名前は「Well hands」というのですが、「well」はよい、「hands」は手で、「いい手」ということで私の旧姓「井手」につながります。いまでも旧姓を使うことを許してもらって活動しています。美山に工房を構えたことで、多くの人に知ってもらい、取材をしてもらいました。友人もできました。工房を立てる場所はどこでもよかったのではなく、美山だからこんなにも多くの人に恵まれ生かされることに日々感謝しています。

2009年に、冬の間だけ吹きガラス体験を始めました。ガラスの魅力や美しさを知ってもらいたくて始めました。それから、ガラスを始めたい人が、たくさん訪れるようになりました。私もそうしてもらったように、たくさん話し、相談にも乗るようにしています。私自身まだまだ勉強中で、進化していくつもりです。ガラスの魅力をまだ知らない人もたくさんいると思います。私のガラスをきっかけに、こんなガラスの表現もあるということを知ってもらったり、どんなガラスが好きなのか、どんな表現が好きかを考える、何かを感じるきっかけになればありがたいです。もしかすると、自分の才能に気付いていない人もいるかと思っています。ガラスでなくても、なんでもよいです。自分の可能性が無限にあるということを覚えていてください。

私がガラスを始めて17年経ちます。今思うことがいくつかありますので、最後に言わせてください。

今付き合っている友達を大切にしてください。まだ自分が何者でもなかった時に知り合った友達というのはかけがえのない友達だと思います。そういう友達は将来いろいろなときに助けてくれます。もちろん、それまで自分がそういう人たちにどのように接してきたかも大切になります。先生や目上の方との出会いを大切にしてください。今は言われてもわからないようなことも、何年もたてばわかることがたくさん出てきます。その言葉に救われることもあります。自分みたいに独立して一人でやっていると、年上の方に声をかけていただけることはどんどん少なくなっていくと思います。そこで、今学生のうちにこういう出会いをすごく大切にしてください。やりたいことに挑戦すること。自分には合っていない、不器用だからできないと決めつけるのは、すごくもったいないと思います。これはいくつになってもそうだと思います。ステップアップのためなら、人とぶつ



美山の仲間たちと（ポスターより）

かることを逃げないでください。一人一人の力では何もできないと思います。みんなに生かされていることに感謝しながら生きてください。

もっと思うことはたくさんありますが、緊張してうまくまとめられずすみません。ありがとうございます。

司会

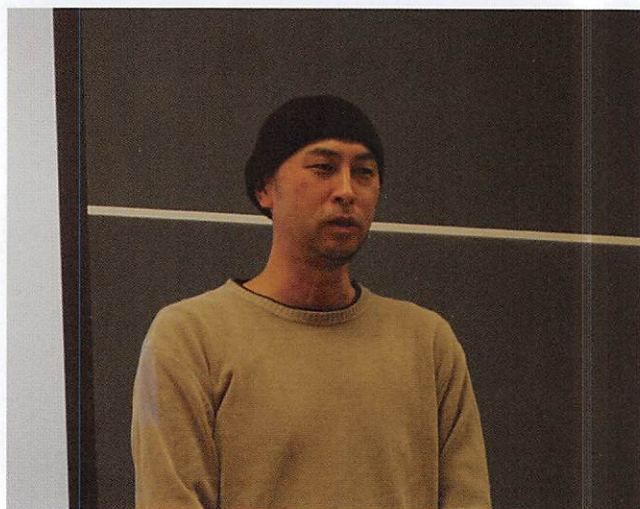
次に松岡晃司さんに講演いただきたいと思います。松岡さんは鹿児島経済大学のご出身で、現在は「ガラス工房 Well hands。」店長としてガラス工房を経営されています。また、「美山未来つなぎ隊」隊長として、陶芸家をはじめとする町を支えた方々の高齢化、若者の流出による人口減少による過疎に悩む美山の町の活性化に取り組んでおられます。

それでは松岡さんよろしく願いいたします。

町づくりじゃなく、町を守り、伝えたい

松岡

私、松岡晃司と申します。43歳です。私は19年前に鹿児島経済大学（鹿児島国際大学の前身）を卒業しています。実は、4年制大学を6年行ったという経歴を持っています。大学6年の時は、「長老」と後輩たちから言われ、よかぶった感じで、肩で風を切って歩いていたのですけれども、きちんと卒業できてよかったなと思っています。



松岡晃司氏（ガラス工房 Well hands。）

今日は町づくりじゃなくて、町を守り、つなげたいというテーマで話をさせていただきます。今こういう活動しながら、今こうやって人にしゃべるといふことの裏付けがあります。それは僕が経済大学の時に、何をしたかということです。

私は大学2年生、二十歳のときに、大学も行かずぶらぶらして家でテレビを見ながら午前中過ごしていたら、小学生の男の子がワイドショーで日本一周を自転車ですていました。二十歳になった人間が、畳の上で親の目を盗んでごろごろしているのに対して、小学生が「僕は夢があります。この日本を1周できたら、僕はもっとすごいことにチャレンジしたい」と語っていました。

それに対して、自分は何しているんだ、このバカは、と自分に腹立たしい気持ちになりました。アルバイトだけにはしていませんし、お金は持っていたので、その足で15万円する自転車を買って、1週間後に日本1周の旅に出ました。夏休みに、36日かけて北海道の宗谷岬に行って、鹿児島に帰ってきました。本当に日本1周を、超ダッシュでしてきました。どうだ、小学生負けてないだろという気持ちで。

そうしたら、急激に自分の考え方っていうのが変わりました。人にやらされていることは本当にやりにくい、結構きついことです。しかし、自分でやろうと思ってやったことは、大変なことだけれども、とても楽しいこと、やりきればものすごく自信がつくことだとわかりました。

そこから無謀にも「俺はなんでもできる」という状態に入りまして、翌年1年間休学して「オーストラリアを1周したるぞ」ということで、自転車で、一人でオーストラリアに行くことにしました。その前に、半年間東京に出稼ぎ

に行きまして、ヤクザ屋さんが経営する建築解体業の日雇い労働者になりました。半年間しましたが、そこでもすごく良い出会いがあったのですが、割愛します。

180万円を半年で貯金して、その足でオーストラリアに行きました。みんなに「がんばれ、がんばれ」って言われて、オーストラリアに行きましたが、英語も全く喋れません。全然喋れないのに行ったので、ご飯を買うことすら難しかった。「This, This, eat eat」くらいのレベルの英語でした。1ヶ月間はとりあえずそれで大丈夫でした。

4カ月いる予定でしたが、1ヶ月後には、お金を無くします。スられたというか、無くした。ドミトリーというところで無くしたのですが、オーストラリアで英語も喋れない人間が、無一文になります。そうになると、何でもやります。土下座して、そこで働かせてくれということを出します。そこに日本人がいて、助けてもらい牧場で働いて、帰りのバス代だけをもらって、チケットだけは持っていたので、日本に帰ることができました。

なんでもできるというきらきら輝いた目から、夢半ばの12月31日、半袖半ズボン汚い短パン姿で韓国の空港に降り立った時、マイナス10℃でした。半袖半ズボンでそのままトランジットで鹿児島空港に着いたとき、髭だらけで、死んだ目で、友達に迎えに来てって言ったら、友達に見て見ぬ振りをされました。

何を言いたかったかということ、この大学時代に経験した失敗っていうのは今の私にとってとても大きかった。準備も何もしない、英会話も勉強もしない、ただ俺はできるという意気込みだけでやったので、大失敗したという事がわかったという事です。二十歳の時に経験したことです。それからなんとか卒業して、就職して、彼女と結婚して、美山というところに住み始めます。

さきほど深港先生が話されたように、美山というところは歴史深く、ものづくりの町として400年間の歴史があります。世界にとどろく美山だった。しかし今、美山を見てみると、その面影は沈寿官窯に行けばありますが、美山全体で考えると、世界にとどろいていません。さらに問題は多くありまして、少子高齢化の問題が如実に表れてきています。

今美山は半径1キロの中に、28件のものづくりをしているお店やカフェがあります。そのカフェやものづくりをしている場所は、現在65歳以上の人たちが半数くらいを占めています。皆さんの年齢を聞いてメモしてまとめて10年後を調べてみると、28件あるお店が、10年後には10

美山の現状と 10 年後・20 年後の予測（店主年齢と後継者有無・過去 10 年の増減）

1. 美山の年齢的な状況 ※今後新しい店舗が増えないと予想して
(美山未来つなぎ隊作成)

	美山の現状	美山の 10 年後予測	美山の 20 年後予測
店主平均年齢	58 歳	68 歳	78 歳
60 歳以上	12 件	19 件	21 件
70 歳以上	4 件	12 件	19 件
60 歳以下	12 件	5 件	3 件
後継者不在	21 件	21 件	21 件
後継者在り	3 件	3 件	3 件
窯元数	11 件	6 件 ※ 65 歳以下	2 件 ※ 65 歳以下
工芸店数	4 件	1 件 ※ 65 歳以下	1 件 ※ 65 歳以下
喫茶・飲食数	5 件	1 件 ※ 65 歳以下	0 件 ※ 65 歳以下
雑貨店数	5 件	2 件 ※ 65 歳以下	1 件 ※ 65 歳以下

2. 過去 10 年間の美山店舗数増減
(美山未来つなぎ隊作成)

	窯元	工芸	喫茶・雑貨
2005	15 件	5 件	4 件
2015	11 件	4 件	10 件
増減	- 4 件	- 1 件	+ 6 件

件になるというのがわかったのです。で、さらに 20 年後どうなるかという、私たちが予想したのは、3 件です。後継者がいるところが 3 件ということです。先ほど先生が言われたような、世界にとどろいていた鹿児島が誇る薩摩焼の里が、20 年後に崩壊する可能性があるということを知ることになったのです。

それを知り、私たちが生きている間に、ひょっとすると美山、薩摩焼の里がなくなってしまうのではないかと、消滅してしまうのではないかと、これは鹿児島県にとってみても、日置市にとっても、日本人にとっても大きな損失になるかもしれない。

そこで、今日の私のテーマになるのですが、町づくりじゃなくて町を守って、次の世代まで美山をつなげたい、ということを考えています。まず、後継者不足が課題です。す

ごい技術を持っている人たちが、美山にたくさんいます。陶芸だけではなく、木工をする人、ギターを作る人、彼女のようにガラスを作る人、そうした人たちがいるのですが、ほとんど後継者がいません。

なぜ後継者がいないのか、教えればよいのでは？と思うのですが、時代がそうなっているのです。例えば 20 年前の陶器バブル、工芸バブルがあったときには、作れば売れるという状態だったので、どんどん弟子を入れて技術を教え、作る人をどんどん増やしました。しかしながら、今の時代は 100 円ショップなど安い製品の台頭があり、飲み物を飲むにも別に高いものでなくても、100 円のものでも飲めるわけです。工芸に興味のない人たちは、断然 100 円ショップのガラスを使います。作品が昔ほど売れなくなった。工芸に興味のある人たちが少なくなった。それが今の工芸の



美山の空き家内装改修作業のようす



空き家改修後（美山笑点）

今の美山の現状です。

工芸をする人たちがなぜ弟子を雇えないか、自分一人、ご飯を食べていくのがやっとの状態が、今工芸界の中にはあるのです。どれだけ技術力が高く、どれだけ評価された人でも、特にガラスや陶芸の場合は夜間にアルバイトをしなければならぬことがあります。陶芸だけで暮らしていく、ガラスだけで暮らしていくということは、なかなか難しくなっています。

なぜそういう状況を招いたかという、20年前に売れすぎたこと、これが大きな原因です。手を抜いて、今まで絵付けをきっちりしていた作業を、シールで転写する。シールを貼って焼くと、絵付けと同じような状況になります。大島紬もそうですが、自分たちで織っていたのでは生産が追いつかず、韓国に技術を渡してしまい、韓国で作らせて安いものを逆輸入することになった。それにより、自分たちがきつくなった。自分たちがこうなることを招いてしまっている。技術の継承よりも、早くできる方法を求め、お金儲けに走ってしまったということです。それが今自分たちの年代に反映されてきています。

それではどうすればいいかと考えるのですが、人を集めるために、工芸に興味を持ってもらうために美山の場合はイベントを起こすことをしました。その中で自分たちができることはここ10年、本当にやり尽くすくらいやり尽くしました。美山窯元祭りも、30年前に発足した時は50人、今では4万人、5万人が3日間で集まる祭りになっています。これは人の力で一生懸命イベントをやり、役場の力も借りてみんなでやった結果です。それでも、人が来てその時だけ売れるだけでは、存続は本当に難しいです。

そこで、私ともう2人、役場の職員と着物屋の若者3人

で話し合い、「このままだと若い人たちがいなくなって美山が無くなるけど、どうすっか、もう疲れたよね、心が折れてきたよね」という愚痴を言っていました。しかし愚痴を言っていたら解決するのかというと、解決しません。自分たちでできることはやってきた。しかし、できないことで最も重要なことがあるのではないかと、それを声にあげてしゃべっていき。自分たちにはできない事をできる人たちがいる、県のトップの人とか、市のトップの人とかに発言して、鹿児島県の工芸をなんとか守ろう、人材育成に力を入れよう、工芸家が観光で生計が立てられるよう、経済循環を作ろうと、そういうことを言える人、できる人に、誠意を持ってしゃべろう、話そう、声をあげようとみんなで考えました。

それにはタイミングがよくて、ちょうど国が地方創生ということをやっていて、各市町村に総合戦略を提出しなさい、ということをやったことになりました。地方創生は、人を作り、町を作り、仕事を作る、これによって地方の力を元気にしようという国の案です。もっと詳しい方がたくさんいると思うので、これぐらいで私はやめますが、それに乗って、美山をこういうふうにしたい、こういうふうにしてほしい、私たちはこうするから、できるあなたたちに、こうしてほしいということを、とにかく詳細に、若手6人でまとめて市に提出しました。

それを提出したら、驚くほど行政の方々の動きが変わってきてくれた。これにはびっくりしました。空き家が目立つから、どうかしてほしいというと、行政の人がすぐ動いてくれて、空き家をどうかしようという動きが始まりました。地域住民と一緒に空き家を再生して、そこを観光交流の拠点にしようということになりました。観



美山で手形制作



空き家で書初め

光で美山に人を呼びたいって言うのと、県の観光連盟の方々が、広域周遊ルートという指宿霧島以外の鹿児島県の魅力ある地域をちょうど探してしまして、その中に美山を入れたいということで、そこで話し合う機会をいただきました。トップの専務に、「美山はこうです、こうです」って酔った勢いで話して、「どうにかして、僕たちもこうするからどうにかして」「じゃあ折り合いつけてこうしましょう」というような流れができてきました。

そのように、できる人たちに喋るというのはとても大変で、すごく勉強と地域側としての準備が必要です。私はオーストラリアに行ったときに、準備がまったくなくて、夢を途中であきらめました。これから何かを成し遂げようという時に、絶対に準備が必要というのが私の中にありました。

そこで、大学時代はしなかった勉強をとにかくしまくって、特に観光に関すること、美山の歴史に関すること、美山の住民が困っていることを調べました。美山の地域の世帯全員、約300世帯に自前で作ったアンケートを配って、美山の良いところと悪いところ、今後の不安や課題をみんなから聞き寄せて6人でそれを集計して、総合戦略の中に入れて提出するという取り組みをしました。

そうすると、できなかったことができてくる。目に見えるように動きが変わってくる。もちろん話した手前責任は出てくるのですが、重要性の高いことをなんとかするには、地域と行政とそれにかかわる人が、一緒にやっていかないといけないっていうのを感じました。やりながら本当に勉強させていただきました。

今いろいろなところで町づくりをしますけれども、楽しくゆっくりとワクワクするようなことをしましょう、とい

うことがたくさんいわれています。とても良い取り組みです。しかし、できることをやるということは、できないことはやらない、やれない、だまっておくということになります。できることもやりながら、できないことをどうすればできるのか、ということについて、地域と行政とが話し合いの場を持てればよいのではないかと思います。私は一市民です。市議会議員でもなければ行政でもない。この立場はものすごくよくて、何でも言える、無責任なことでも責任がかりそうなことでも何でも言える。この立場を悪用させていただいて、言いたい放題言わせてもらっています。しかし責任を取らないわけではなく、美山という看板を背負わせていただいて、今後変わるであろう美山の状況を、楽しみにしているところです。

最後に、3人の言葉が僕を支えています。まず1つに、父親がずっと言っていた言葉「だれもせんならわいがやれ」ということです。いいことだけれども、面倒くさいこと、だれも言わないことを、だれもせんならわいがやれと、小さい時からずっと言われています。それに関してはもうやりたい放題です。それで、奥さんにすごく迷惑かけています。

2つめに、ヤクザのところで働いたと申し上げましたが、親父さんとその人のことを呼んでいました。その人が言ったのが、「丸い大人になるなよ。1つ角はとっとけよ」酔っぱらうたびにその言葉を言うので、私は半年の間に300回以上聞きました。その理由は、坂を上がるときは角が1個あると上がりやすい、坂を下るときは引っ掛かりやすい。ということは、坂を上がるとき丸い状態だと上がれない。しかし角があつて引っ掛かって上がっていくのだから、個性が少しずつでも上がっていくきっかけになるのだ。坂を

下るときは、引っ掛かりやすい。丸い人たちがどんどん流れにのって落ちていくときに、個性がある人間は引っ掛かるのだ。そこでまたゆっくり動いて引っ掛かる、下がるときもゆっくり下がるから、個性を絶対に持っておけよと言われました。それは本当にそのとおりだなと思いました。大変感謝している人です。

最後に、私は観光カリスマとして知られる山田桂一郎さんと昨年出会いました。彼は日本全国駆け回って、町づくりの話を学生や社会人の方、行政の方に一生懸命語っています。ときには厳しく、ときには優しく喋るのですが、山田さんの言うことは、他の観光のアドバイザーの方とはちょっと違って、本当に深い意味を持っています。彼は1年のうち、半分スイスに住んでいてガイドをして、半分は日本にいてこういう活動をしています。本当に寝る間もな

いくらい動き回っています。何のために活動をしているのですか？と酔った勢いで尋ねると、「日本を世界一幸福度の高い国にしたい」と言いきったのです。観光を通じて、自分が自分の町を知り、自分の町を改善する。自分が日本という国を魅力的にPRして、外国の人たちから賞賛を受ける。自分が便利になっていく。それで世界一幸福度の高い、みんなが日本に生れてよかった、日本は最高だと言って国にするというのを彼は言いました。

すごいこの人は、と思いながら、それでは私は美山の住人が世界一幸福度の高い町になってくれればいいな、という思いで、やらせていただいています。これからも長い旅が続くと思うのですが、ぜひ美山という町にも遊びに来てください。本当に歴史深い良い町ですので、どうぞよろしく願います。